

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370585

研究課題名(和文) 口頭発表時における質疑応答コミュニケーション能力を高めるための教育方法の開発

研究課題名(英文) Development of Teaching Materials to Improve Question-and-Answer Skills in Oral Presentations

研究代表者

仁科 浩美(Nishina, Hiromi)

山形大学・大学院理工学研究科・准教授

研究者番号：10431644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学等で行われる日本語による学生のプレゼンテーション後の質疑応答に注目し、質疑と応答が有機的に行われ、発表者である学生がより有益な示唆や内省が得られるための教育方法の開発を目的とした。本研究では、研究発表に関する内容を紙媒体の教材に加え、これまでほとんど開発が行われていない動画を作成した。これにより、発表に対する具体的なイメージを把握することが可能になった。教材は、プレゼンテーションを発表スピーチ、スライド資料、質疑応答の3点から捉えた15課から構成される。教材では、各自で考えた後、複数名で話し合って検討する問題を作り、授業の中で質疑応答の話し合い場面を経験できるものとなっている。

研究成果の概要(英文)：In this study, we developed teaching materials on academic presentations in Japanese. The teaching materials have two features. The first feature is that in addition to using tradition texts, the teaching materials also make use of short movies to image the learners in the language. Four movies were produced for this study: 1) Laboratory introduction, 2) Research introduction, 3) Class presentation, and 4) Graduation thesis presentation. Students who used the materials reported that they helped facilitate their understanding of the performance aspects of academic presentations in through watching real-life examples. The second feature of the teaching materials is to that they show several types methods for responding difficult questions such as misguided questions from listeners in Q & A sessions. They also teach that there is no definitive way to response to questions and that it is important for students themselves to decide the appropriate way in which to respond in each situation.

研究分野：日本語教育

キーワード：教材開発 プレゼンテーション 質疑応答 話し合い コミュニケーション能力

### 1. 研究開始当初の背景

今日、プレゼンテーションに関してはビジネスマン向け、学生向けを問わず、非常に多くの書物が出版されているが、その多くは発表スピーチが中心の内容で、説明型のものである。また、Basturkmen(1999)が指摘するように、実際の発話と書物に掲載されている表現との乖離も少なくない。さらに、多くの者が発表スピーチよりも難しさを感じる質疑応答についてはこれまで軽視されがち傾向が見られた。これまでの執筆者が行った科研費の研究(平成23年度～平成25年度科研費研究)ではこの点について、実際の学生によるプレゼンテーションを分析し、また、インタビュー調査を行った。その結果、質疑応答の難しさには、日本語表現を十分に保持していない点や、対人関係も含んだ要因が背景にあることを明らかにした(仁科2012、2014)。

次の段階として、どのような指導・教育を行えば、学生がより積極的に臨むことができるのか教材を開発することにより、一定の指針を与えることが可能であると考えた。当時においても依然としてプレゼンテーションの教材は、発表スピーチ部分に重きが置かれていて学生のニーズに応えるものは少なく、開発する意義は大きいと思われた。

### 2. 研究の目的

本研究では、プレゼンテーションそのものもさることながら、大学等での研究活動に関して行われる日本語によるプレゼンテーション後の質疑応答に注目した。質疑と応答が有機的に成立し、発表者である学生がより有益な示唆や内省が得られるための教育方法の開発を目的とした。具体的方法として、指導に用いる教材の開発を目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 執筆者の過去の質疑応答に関する一連の研究の補強を行った。過去の研究では、プレゼンテーションを行う側の学生について質問紙調査およびインタビュー調査を行ったものの、質問側になることが多い教員については質疑応答への意識・態度は調査していなかった。また、先行研究にもそのような研究は見当たらなかった。そこで、まず、研究期間前半においては、教員14名に質疑応答に関するインタビュー調査を実施した。

(2) 発表者側および質問者側双方からの問題点を包括的に分析・検討を行った。

(3) 研究期間の後半は、教材開発にあたって教育的観点から内容・項目の検討及び抽出を行った。教材として一つのまとまった形にするには、質疑応答部分だけでは成立しないため、質疑応答も含めたプレゼンテーションについて扱う教材を作成した。

(4) シラバス作成後、紙媒体での教材を試作版として作成した。この時点で、執筆者と日本語教育に携わる連携研究者が各大学で担

当する授業で試行し、その後内容を調整した。また、日本語を専門としない他の連携研究者からは専門分野からのコメント・意見をもらい、内容に反映させた。

(5) (4)と同時に、紙媒体の教材とともに使用する教材として動画制作も行い、3つの発表事例を制作した。

(6) 試用に際しては、筆者が担当する授業はもちろんのこと、他大学の同様の授業を扱う教員(4機関、うち1つは海外の大学)に依頼し、実施した。

(7) 得られたフィードバックから、指摘箇所を再検討し、修正を行った。最終的に動画を新たに1本加えた、完成版となる教材を開発した。

### 4. 研究成果

(1) 教員へのインタビュー調査：質疑応答セッション時に、質問者側となることが多い教員へのインタビュー調査からは、研究の本質に関わる質問によって聴衆も含めた全体の理解が深まり、次の段階へと進めるための意見交換がなされるのが良い質疑応答と考えていること、指導時もそれに向けて発表や回答について指導を行っていることがわかった。しかしながら、対人関係の問題も含む、勘違い等による質問への対応までには触れていないことがうかがわれた。勘違いや誤解のある質問への対応に関しては、相違点対照説明、再説明、事後対応提案、回答不能の表明、ひるまず回答の5つに分類することができた。これらの結果を教材の中に活用することで、より実践的な内容が扱えるものと考えた。

#### (2) 試作版作成

##### 紙媒体による教材

教材の大きな特徴は、プレゼンテーションをテーマにした教材であるが、これまであまり注目されていなかった質疑応答部分に着目し、対人関係についても触れている点、そして、教材の中の問いに対して、個人で考えた後、他者と対話することで再考することにある。教材名は、『考えを伝え合うプレゼンテーションと質疑応答』とした。表1に目次を示すとおり、教材は15課から構成される。全体は、「プレゼンテーションとは」「発表のスピーチについて」「発表スライドについて」「質疑応答について」「発表練習・まとめ」の5つに大別される。また、言語的な面以外に留意する事項については、「Note」として緊張や時間の調整、留学生ならではの注意するポイント等を7箇所提示した。さらに、教材の最後には、付録として、実際のプレゼンテーションとほぼ同じ状況での発表場面をつけた。

課の構成(図1参照)については、まず、その課で習う学習内容を提示した後、読んで内容を理解する部分を設けた。その後ろには、実践練習問題(タスク)や、行動の意義や目的を改めて考える練習問題を提示した。これら

表1 開発教材『考えを伝え合う プレゼンテーションと質疑応答』課の構成

課	課のタイトル
1	プレゼンテーションとは
2	発表までのプロセスと発表の構成
3	発表してコメントをもらう・コメントをする Note1 緊張とどう向き合う？
4	発表を準備する(1) 導入部分 Note2 発表で話す文の種類 3つの役割
5	発表を準備する(2) 研究方法 Note3 調査項目を述べるとき文から名詞句への変換
6	発表を準備する(3) 一つのデータからの結果および考察 Note4 図表を説明するときによく用いられる表現
7	発表を準備する(4) 複数のデータからの結果および考察
8	発表を準備する(5) まとめの部分 Note5 時間の調整
9	発表スライドを作成する(1) 日本語表現
10	発表スライドを作成する(2) 情報の示し方
11	質疑応答(1) 心構え・質問を受ける Note6 実験系の発表における質問
12	質疑応答(2) 回答する Note7 留学生が特に貴をつけたいこと
13	質疑応答(3) 対人関係に配慮し回答する
14	発表する
15	発表を振り返る
付録	研究発表例

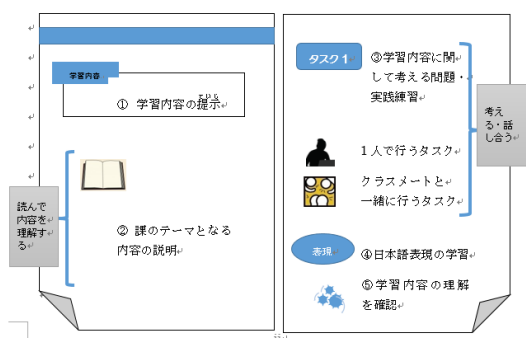


図1 課の構成

の練習問題については、一人で考えた後に、その内容を小グループで互いに説明し合い、意見交換する流れにした。これは、プレゼンテーションに関する知識を提供するだけでなく、タイトルにもある「考えを伝え合う」ことを重視したためである。

動画

動画に関しては、紙媒体の教材の内容を視聴覚の面から補うものとして作成した。動画はいずれも字幕なしと字幕ありの2タイプを設け(図2)、学習の目的や日本語力に応じて

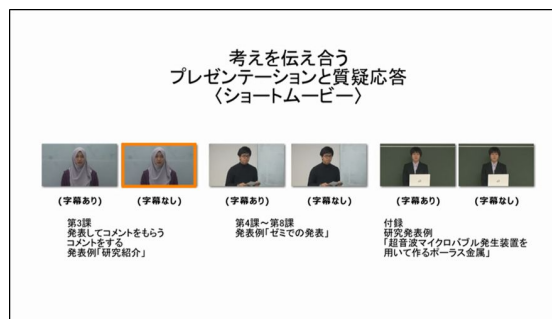


図2 動画トップページ



図3 学科・研究紹介の一場面(字幕あり)

選べるようにした。最終的に4本を制作した。以下、詳細に述べる。

A. 学科/研究室紹介スピーチ(第3課で使用)

[設定]学部生の留学生(理系)が自分の学科および今後取り組みたい研究についてスピーチを行う(図3)。

専門が異なる学生が集まった教室で、自分の研究室について口頭のみで説明するもので、映像教材では実際の留学生が自分の所属する工学系の研究室を紹介している。映像時間は2分10秒である。このような場面を設定したのは、学生が集まる場で取り上げられやすい話題であるだけでなく、就職や奨学金選考の面接等においても実際に留学生が直面することが多いからである。

スピーチの構成は、1) 学科の概要、2) 研究室で扱うものの代表例、3) 我々の日常との関連性と研究への抱負の3部分から作られている。スピーチ原稿は、過去の授業において留学生が作成したものを筆者が加筆修正を行い、完成させた。そして、その原稿に基づき収録日に本人がスピーチを行った。発表原稿は、一例としてテキストにも掲載しており、学習者はそれを参考に各自の専門に合わせ、学科の紹介や自分が今後研究において行いたいこと等を発表する。

B. 研究紹介スピーチ(第3課で使用)

[設定]大学院生の留学生(文系)が自身の漢字の研究についてスピーチを行う(図4)。試行からのフィードバックを受け、追加した動画である。スピーチの構成は、1) 研究テーマ、2) 具体例、3) 今後、行いたいことの3部分から作られている。映像時間2分7秒。



図4 研究紹介の一場面(字幕あり)

C. ゼミでの文献調査発表(第4課~第8課で使用)

[設定]留学生が、日本人学生および留学生からなるゼミにおいて、海外からの観光客が必要としているサービスについて、複数の文献をもとにゼミで発表する(図5)。



図5 ゼミでの調査報告の一場面(字幕あり)

実際の留学生がスライド資料を用いながら説明している。プレゼンテーションの原稿は執筆者が作成した。映像時間は、プレゼンそのものが10分20秒、質疑応答部分が3分13秒、計13分33秒である。どの専門分野の留学生でも比較的兴趣を持ちやすいよう、「外国人観光客に提供すべきサービス」を発表テーマとし、外国人観光客が日本を訪れたときどのようなサービスを必要としているかを既にある調査から考えるというものにした。その概要は、「今日、外国人の観光客数は増加の一途をたどっているが、これまでの外国人観光客に対する調査は実態調査が多い。快適な旅行を提供するために、外国人観光客が日本に来てどのようなサービスを必要としているのかを4つの資料を用いて検討した。その結果、外国人が必要としているサービスは、日本に来て情報収集するための無線LANの環境整備に関するサービス、及び、見る・遊ぶ・買い物する際のコミュニケーションの障害を取り払う言語に関するサービスであることがわかった」というものである。

テキストでは、この映像教材を4課から8課までの課で、分割して用いる。本来であれば、各自が実際に行う調査や実験等に基づいた内容を扱うのが理想的と思われるが、専門的な事柄に関する知識を学生がまだ学部3、4年生及び研究生のこの段階では習得してい

ないこと、各学習者の専門が異なること、日本語教師も各学生の専門に精通しているわけではないことから、ここでは扱いやすいと思われるテーマを用い、文献調査に基づいたプレゼンの形式を採用した。しかしながら、その一方で、このテーマは時代とともに状況が変化しやすいというマイナス面も含まれている。

また、ゼミでの場面という設定であるため、プレゼン後には司会による進行のもと、発表を聞いていた他の学生からの質問に答えるという質疑応答の場面も設けた。テキストの当該課(12課)は、「質問は理解できたが、答えがわからない」、「質問は理解できたが、日本語で説明するのが難しい」、「日本語は全部聞くことができたが、質問したいことがよくわからなかった」等、回答するのが難しい場合にどのように対応すべきかを学ぶ箇所であり、これを具体化したインターアクションの例を映像で確認することが可能である。テキストではこの場面により着目し、実践でも使えるよう、ディクテーションの問題として扱い、「相手の質問内容を確認してから回答する」、「断定を避ける言い方を用いる」、「不備を詫げる」等の場面を聴覚と視覚で確認するようにした。

D. 卒業研究発表

[設定]日本人学生が専門の学科にて卒業研究発表を行う。教員からの質疑応答部分も含む(図6)。



図6 研究発表の一場面(字幕あり)

学習者のプレゼンの最終的な目標となる発表として、日本人学生が学部4年生時に行った卒業研究の発表を活用し、教材化した。したがって、場面としては、改まり度の高い発表場面となっている。工学系分野において実際に行われたプレゼンの原稿を可能な限り平易な表現に書き換えたものを用い、日本人学生が発表を行っている。映像時間は、発表そのものが8分15秒、質疑応答部分が4分45秒、計13分00秒である。プレゼン後の質疑応答については、教員が学生に質問するという一般によく見られる形式に則って撮影した。この場合、相手が教員ということで映像2の場合よりも対人関係をより意識しなければならぬが、映像ではテキストで扱った「自らの結果についてのみ再度丁寧に答

える、「回答できないことを正直に言う」といった回答方法が織り込んであり、聞き手とのインターアクションについての具体例を視聴することができる。この研究発表は、本テキストにおいて一つの最終的な目標となるものであるため、教材化にあたっては理解しやすい内容の提供に配慮したが、大学での研究という点から、ある程度の専門的な用語や内容は残さざるを得ず、今回は付録として位置づけた。

なお、全体を通した操作上の工夫としては、上記 A、B については段落ごとに、C、D についてはスライドごとに動画を区切ったものも用意し、必要な個所だけ視聴する場合と、通して視聴する場合と選択できるように設計した。

### (3) 試用およびフィードバック

試用を 4 機関（うち 1 機関は海外の大学）の教員に依頼した。また、筆者が指導する学習者には質問紙調査によりフィードバックを得た。その結果、以下のようなコメント・指摘が得られた。

#### (プラス評価)

- ・緊張への向き合い方なども示されており、学生は興味深く読んでいた。
  - ・スライド作成における注意点が役に立った。
  - ・質疑応答時の対応の仕方が参考になった。
  - ・発表で用いる日本語表現が書いてあり、実際にこれを使って、発表を行った。
  - ・動画をみることにより、研究発表を具体的にイメージすることができた。等
- #### (マイナス評価)
- ・理系の内容が多い。
  - ・動画画面が暗いものがある。
  - ・最初の説明のページの量が多い。
  - ・タスクの指示文が不明確なものがある。等

### (4) 完成版作成

マイナス評価を受けたものについては、出きる限り、修正を加えた。特に、文系の内容が少ない点については、例文および研究紹介に関し文系を題材にした動画例を加えるなどの改善を行った。そして、最終的に本研究をまとめる最終版を作成した。

### (5) まとめと今後の課題

紙媒体と動画による知識・情報を併せ用いることにより、研究発表に関してより効果的に学習することができる教材の開発を行った。特に、本研究では、質疑応答に注目し、学習者が返答に窮した場合、どのように対応するのがよいのかをいくつかの対応方法を示し、複数の条件の中から自らが判断する形で提示した。研究発表には分野により、多様な形があり、全てを網羅できたとは言えないものの、調査・実験型の研究発表の基礎としては有用な教材が開発できたと考える。今後は、より多くの分野で使用できるよう、汎用性の面での改善を行っていきたい。

### <参考文献>

- ・Basturkmen, H. (1999) Discourse in MBA Seminars: Towards a Description for Pedagogical Purposes, *English for Specific Purposes*, 18(1), 63-80.
- ・仁科浩美 (2012) 「日本人学生が口頭発表の質疑応答時に感じる困難点 刺激回想法を用いた日本人大学院生への調査」『研究発表予稿集 第 1 分冊』日本語教育国際研究大会名古屋, 33.
- ・仁科浩美 (2014) 「理工系留学生の発表場面における質疑応答の課題 コミュニケーション・ブレイクダウンの観点から」『専門日本語教育研究』16, 37-44.

### 5. 主な発表論文等

#### (雑誌論文)(計 3 件)

仁科浩美, 学生のプレゼンテーション時における回答困難な質問への対応、工学教育, 査読有, 66(2), 18-23, 2018.

仁科浩美, 研究発表スライド作成における経験の乏しい留学生の問題点 発表経験の多い博士後期課程の学生と比較して, アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル, 査読無, 9, 55-63, 2017.

仁科浩美, 理工系留学生の発表場面における質疑応答の課題 コミュニケーション・ブレイクダウンの観点から, 専門日本語教育研究, 査読有, 16(16) 37-44, 2014.

#### (学会発表)(計 6 件)

仁科浩美, 日本語教育学会秋季大会、国内会議、朱鷺メッセ(新潟), アカデミックな場面におけるプレゼンテーションを学習するための映像教材の開発, 2017 年 11 月.

仁科浩美, 15th International Conference of the European Association for Japanese studies, 国際会議、Universidade Nova de Lisboa, Learning skills and practices for question-and-answer sessions in presentation teaching material, 2017 年 09 月.

仁科浩美, 鎌田美千子, 日本語教育学会第 8 回研究集会 中国地区、国内会議、山口大学, 聞き手との対話を意識したプレゼンテーション教材開発の試み, 2016 年 12 月.

仁科浩美, International Conference on Japanese Language Education, 国際会議、Bali Nusa Dua Convention Center, 口頭発表の質疑応答における学生と教員との

コミュニケーション時の問題点 教材開発に向けて , 2016年9月.

仁科浩美, 専門日本語教育学会研究討論会、国内会議, 口頭発表に関する教材分析 質疑応答の対話に目を向けた教材開発を見据えて , 2016年3月.

仁科浩美, シドニー日本語教育国際研究大会 (SYDNEY-ICJLE2014), 国際会議, シドニー工科大学, 理工系留学生の質疑応答場面におけるコミュニケーション・プレイクダウンからの回復, 2014年7月.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

仁科 浩美 (NISHINA, Hiromi)  
山形大学・大学院理工学研究科・准教授  
研究者番号: 10431644

### (2) 連携研究者

鎌田 美千子 (KAMADA, Michiko)  
宇都宮大学・国際学部・准教授  
研究者番号: 40372346

東山 禎夫 (HIGASHIYAMA, Yoshio)  
山形大学・理工学研究科・名誉教授  
研究者番号: 50144209

安原 薫 (YASUHARA, Kaoru)  
山形大学・理工学研究科・助教  
研究者番号: 60375318